

Title	ユウェナーリスの『サトゥラエ』 (4)
Sub Title	Juvenal's Satires, translation with notes (4)
Author	藤井, 昇(Fujii, Noboru)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	1985
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.17 (1985. 12) ,p.21- 49
JaLC DOI	10.14991/005.00000017-0021
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000017-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ユウ エナーリスの『サトゥラエ』

藤 井 昇

一の巻

いつまでもこのわたしが聴き手だけでいなきやならないのか？　こうもしょっちう嘆れ声のコルドゥスの『テーセウス物語』に辟易しながら、いっぺんも仕返しができないというのか？　（一―二）

という、此方では（ローマ風）喜劇を、彼方ではエレギーア詩を、朗読されるというめに遭って、それでわたしは泣き寝入りというのか？　老大きわまるテレーポス（の話）や、書巻の上端の余白いっぱい書かれ、裏まで行ってもまだ終らないオレステース（物語）にまる、一日つぶされて、泣き寝入りというのか？　人が自分自身の家をよく知っているといても、わたしが（軍神）マールスの杜とアイオロスの巖に近き（火神）ウルカーヌスの洞を知っているほどじゃない。風どまがどんなことをやっているか、どういう亡霊を（冥府の判官）アイアコスが責め苦しめているか、どこからもう一人（の英雄）は黄金の羊毛を盗んで持ち帰るか、モーニユコスは樺の樹をいくつ投げつけるか、そういう神話で、しょっちうフロントーの（家の）鈴懸の樹々はこたまし、大理石（の像）は揺れ動き、ひっきりなしの吟誦者に柱廊は壊れるほどだ。こうピンからキリまで詩人がみな同じものを歌っているのだよ。とあれば、このわたしとて（昔）

鞭から手を引込めた（おぼえがある）し、スツラに一人として熟睡するようにと忠告を与えたこともある。（¹⁶どこをむいても詩人に出会す今の世に、どのみち無くなる紙ならば、助けてやるのも愚かな慈悲だ。だが、アウルンカ（の町）に育てられた偉大なる人（ルーキーリウス）が馬を御し走らせたこの（諷刺詩という）広場を、なぜ（わたしが）敢て走りまわりたいのか、もしおひまがあつて、平静にも、の道理に耳傾けてくださるなら、述べるとしよう。（三―一二）柔弱な（¹⁹きん）卑劣な男が妻をめとり、（男の真似する）（²¹）メーウィアが（²¹）エトルーリアの野猪を突きさして乳房もあらはに槍を手にしているというのに――、（かつて）わたしが若かつたころ、わたしのかたい髭をジョキジョキ言わせた床屋ふぜいが、たった一人で貴族全体と財を競おうというのに――、（²³）ニールス河の賤民の一人、カノープス出の奴隸クリスピースが、（²⁵）テュロス染めの（深紅の）マントをひょいと肩にあおり、（²⁶）夏は汗ばんだ指にはめた黄金（の指輪）を振って風を通し、それ以上に重い宝石ははめて歩けないというのに――、（²⁸）諷刺詩を書かずにいるというのは難しいことだ。

（二二―三〇）

というのは、弁護人ふぜいのマトーが、新しい轎いっばいにおさまってやって来る、その後ろからは、（自分の）大親筋を密告し、すでにむしばまれた貴族階級から残っている分までもたちまち奪い取ってしまうという、（密告者）（³¹）マッサにも怖れられ、（同じく）（³³）カールスもこれを賄賂で宥め、（³⁴）ラティースはびくびくしてひそかに（女役者の）（³⁵）テュメレーをよこして来る、という御仁がやって来るとあつては、誰がいったいこの不正の都（ローマ）を、そんなにまで忍び、そんな鉄のような心で耐えていられるだろう、君を除けてまかり通るのが、夜（のつとめ）で遺言書にありついた連中で、そいつらを雲の上に運んでゆくのは今日、最高の出世の一番の道たる、恵まれたばあさんの玉門とあつてはな。（³⁹）（遺産も）十二分の一は（⁴⁰）プロクレーユスだが、（あとの）十二分の十一は（⁴¹）ギッローが取る。めいめい股間の寸法に

従つて相続人となるわけだ。ともかくにも、めいめい（過淫に捨てた）血の代償を受けとるがいい。そして、裸足で蛇を踏んだ男が、⁽⁴³⁾ルグドゥーヌムの祭壁で演説しようとする弁士さながらに、色蒼ざめるがいい。（三〇—四四）

（預かった）孤児にからだを売らせて台無しにしてしまふようなやつとか、そうかと思えば何にもならないような有罪の判決を受けたやつが、お供を大勢連れて（練り歩き、街の）民衆に窮屈な思いをさせているからには、どれほど腹が立つてこの肝がからからに灼けているかを、何でくだくだと語ることがあろうか？ ⁽⁴⁵⁾現金が安全なら不名誉が何だ、つていうわけなのだから。追放された（はずの）マリウスは、⁽⁴⁶⁾八つの刻から飲んで神々を怒らせて好い気持ちになつてゐるのに、（訴訟に）勝った（はずの）⁽⁴⁷⁾属州よ、お前は泣いている。（四五—五〇）

いったいこのわたしがこうしたことを、⁽⁴⁷⁾ウエヌシア（生まれ）の（ホラーティウスさながらに夜）⁽⁴⁸⁾燈（の下で書きしるす）に価すると思わぬとでも？ こうしたことをこのわたしがやつつけないとでも？ だが、⁽⁴⁹⁾（遺産）取得の権利が女房に全くないと、⁽⁵⁰⁾（亭主が）女衒よろしく間男の金を受け取つて、天井を仰いで見て見ぬふり、盃に覚めている鼻を突込んでからいびきをかくのもお得意、というのに、何だつて、それよりも、⁽⁵¹⁾ヘーラクレース物語やディオメデース物語や⁽⁵²⁾迷宮の（牛の）吼え声、さては男の子（イイカロス）が（天から落ちて）突込んだ海のこと、⁽⁵³⁾空飛ぶ工匠（ダイダロス）の話も書くというのか？ （さらにまた）⁽⁵⁴⁾財産を馬に注ぎこみ、先祖の資産もすっかり無くしてしまつたようなやつが、⁽⁵⁵⁾軍団の指揮官の座を求めることを当然至極と考えているというのに——。（そうした手合は）⁽⁵⁶⁾若僧のくせにア

ウトメドーンよろしく、フル・スピードで⁽⁵⁷⁾フラーミュウス街道を突走る、ご本人が手網を握つて、⁽⁵⁸⁾外套を着たガール・フレンドに見せびらかそうつていうんだから。（五一—六二）

小さな蠟引板（の遺言書）と濡らした宝石（の印形）を使って、立派で恵まれた人士になりおおせた偽造文書の署名

人が、閑日月を楽しむマニケーナスそっくりに、輜はほとんどむきだしで、こっちもそっちも開けっぱなしのまま、
(65)もう六人の肩にかつがれて運ばれてゆくというさまじゃ、四つ辻のまん中で大きな蠟引板にいっぱい諷刺を書くのがな
んで楽しくないことがあろうか？ (六三—六八)。

(つぎに) 出会うのは錚々たる刀自、この女は亭主が咽喉が乾いているとき柔らかなカレーム酒を出すにあたつて、
(71)ヒキガエルの毒を混ぜ、⁽⁷²⁾ルークスタもそのけに、自分と親しい不慣れた女たちに、評判なんか物ともせず、民衆の眼の
前で、亭主の黒い屍を墓場に運ぶことを教えたものだ。ちよつとした存在になりたいたなら、窮屈なギュアラ⁽⁷⁵⁾(島への追
放)か、監獄ゆきになることを何か思いきつてやるがいい。廉直は賞讃され、そして凍えているばかりだ。(怪しげな連中
が)庭園を、宏壮な別荘を、⁽⁷⁸⁾(豪華な)卓を、古い銀器を、外側に浮彫りになって牡山羊(模様)が出ている酒盃を、
持っているのは、犯罪のせいなのだ。(息子の)嫁が金に貪欲なのにつけこんで誘惑する父親だの、身持ちの悪い花嫁
だの、⁽⁸⁰⁾ロウ・ティーン⁽⁸⁰⁾の姦夫だのがいるというのに、いったい誰が(諷刺詩も書かず)安閑と眠っていられるだろう。
たとえ天性(の才能)が否んでも、怒りが詩を作らせる。どんなものであれ、このわたしは、⁽⁸²⁾クルウィエーヌスにできるよ
うな詩をだ。(六九—八〇)

⁽⁸³⁾デウカリオンが、大雨が海を捲きあげたとき、舟で(パルナッソス)山に登って神託を求め、少しずつ巖が生息に
暖まり柔らくなつて、(妻)ピュッラーが男たちに裸の娘たちを見せた日このかた、人々がやっていることは、誓いで
あれ、怖れであれ、怒りであれ、愛欲であれ、喜びであれ、東奔西走(のすがた)であれ、何によらず、わたしの詩集⁽⁸⁴⁾
のさまざまな材料なのだ。それに、こんなに悪徳が豊富に満ち満ちているときがいつあっただろう？ 貪欲というもの
にこれ以上大きくふところが開いていたときがいつあっただろう？ いつ⁽⁸⁵⁾鬻子がこんなにも人の心を高揚させただろ

う？　なにしろ財布を携えて（骰子の）盤の運だめしに行くのじゃなくて、金櫃（そっくり）賭けてやるんだから——。そこでは（金を用意した）執事（の奴隷）を盾持ち（よろしく）侍らせて、何回戦闘があることだろう！　いったいだの狂気だけで、十万セステルティウスをすつてしまい、それでいて（寒さに）震えている奴隷に下着一つもやれないでいられるものかね？　（われわれの）祖先でいったい誰がこんなにたくさん別荘を建てたかね、誰がこっそりと七皿も晩飯を食うたかね？　今日びにや僅かばかりの施し籠が戸口に置かれて、そいつをトガを着た（被護民の）連中が先を争って奪う、というありさまだ。にもかかわらず、あのかたはさきに顔を検分なさって、お前が替玉でやって来て、しかも名を偽って求めているのじゃないかと、ご心配だ。間違ひなしと認められて、はじめてお前は貰えるのだ。（ついであのかたは）トロイアの末裔（と称するローマの貴族たちを）さえ、呼立人に名を呼ぶようにお言いつけた、というのは、（貴族）連中もまた、われわれといっしょになって、入口に押しかけているのだから。「法務官にやれ。それから護民官にやれ」だが、解放奴隷がさきにいる。「俺がさきにここにゐるんだ」と言うのだ。「何だって俺がこの場所を守るのをこわがったり、ためらったりしなきゃならんのだ？　そりや俺アエウプラーテース（河）のほとりに生まれたさ、そのこたア、たとえ自分でそうじゃないと言ったって、耳にあいてるお上品な孔が明かしちまおうて……。だが、店が五軒、こいつが（俺に）四十万を呉れるのだ。これより結構なそ、なもの、を、広縁（のトガの高位）がもたらすというのだ、ラウレントゥムの畠で（古い家柄の）コルウィーヌスが羊を集めて番をしているというのに、この俺さまがパッラスやキヌスふぜいよりもっと物持ちだというならば」されば、護民官らは待つがよい。富が一切にまさって、最近この都に白い足してやって来た男が「神聖なる栄誉」なんぞにゆずらないのがいいのだ！　なにせ、われらの間では、富の威厳が最高の聖なるものなんだから——。そりやア「平和」や「信義」や「勝利」や「美德」や（こうのとりの）

巢に挨拶すると啼き声の聞こえる「協和」の女神が崇められているようなぐあいには、縁起でもない「金銭」よ、お前はまた神殿には住んでござらぬし、われらも金銭の祭壁ひとつ建ててはおらんけど——。(八一—一一六)

だが、最高の榮譽(105)を持った高位の連中(106)が、年の終りに、施し籠(107)からいくら上り、どれだけ収入に加わっているかを計算する始末では、この施し籠(108)から、さてはトガ、さては靴、パンに家庭の燃料に、とまかなっている寄食者というものはどうしたらいいのだ？ 群なす轎(109)に乗った相当の連中(110)が百クワドランスを追い求め、妊娠(111)して疲れきった女房が亭主の跡について引っぱり廻されるのだ。(と思えば)こっちは女房の代りに空っぽの、閉ざされた轎を指して、もうよく知られた手口も狡賢く、居(112)もしない女房の分をもらおうとする。「うちのガッラだよ」とやるわけだ。「早く行かせてくれ。行かせてくれんのかね。ガッラ、首を出しな。じゃましないで、いま眠っているから」(一一七—一二六)

(そういう)一日そのものが何をやるかみごとに順序立ってはつきりしている。施し籠(113)をもらうと、次はフオルムと、法に明かるいアポッローン(114)の像、さらに凱旋將軍の肖像だが、その中にや誰やら知らぬエジプト人の「アラビア長官」が臆面もなくおのれの名と称号をかがけ、その像に構わずなされることは単に小便だけじゃない。(一二七—一二八)

老いて疲れた被護民(129)ふぜいは玄関から帰り、念願(130)を捨てて。こやつ、夕食に招かれるかもしれない希望が一番あとまであったのだけれど——。あわれ、連中はキャベツと薪を買わにやらぬ。それにひきかえ、こいつらの親分は山海の珍味を貪りくらい、誰も寄せつけぬ臥床に自分一人横たわることだろう。なぜって、かくも美々しい、大きな、かくも古くより伝わった円卓から、こうした手合は一度の食事で祖先の財産を貪り食うてしまうのだもの。もうすぐ寄食

者も一人もいなくなってしまうだろうて！ 誰があのぜいたくの汚^{きた}ならしさを我慢できようか？ 猪という、宴会のために生まれた動物を、全部自分一人に供させる胃袋⁽¹²¹⁾というものは何と大きなことか！ もっとも、お前が着物を脱ぎ、食⁽¹²²⁾いすぎて脹^はれ上った腹をして食べた孔雀を浴場まで持つてゆくとなると、天罰⁽¹²³⁾靨^え面だ。それがもとで突然に死ぬ、しかも年とつていながら遺言もしてなかったということになる。新しい、哀しくもない噂⁽¹²⁴⁾があらゆる宴の席をまわる、死骸⁽¹²⁵⁾は腹を立てた友人に喝采^{カサイ}されながら（焼場へ）運ばれてゆくのだ。（一三二—一四六）

後世がわれらの（ひどい）世相にこれ以上つけ加えるようなことはなにもないだろう。われらの子孫たちも同じことをやり、同じ欲望を持つのだろう。あらゆる悪徳は落ちるところまで落ちるものだ。（諷刺という）帆を（十二分に）使つて、いっぱいにくくらませよ。ここで君恐らく言うかもしれない。「題材に匹敵する詩才はどこを押せば出てくるのだ？ 燃ゆる心に好きなことを何でも書いた先人たちのあの率直さはどこから求めたらいいのか？」⁽¹²⁶⁾ 誰の名をわれ敢て言はじ。ムーキウス（わが）言^{こと}を赦さむも、赦さざるも、何のことかある？⁽¹²⁷⁾（と言いつ切ったような）（だが）⁽¹²⁸⁾ ティゲッリヌスを槍玉に挙げてみたまえ。（とたんに）君は咽喉を縛りつけられ、立ちながらぶすぶすといぶり焼かれたあの（キリスト教徒と同じ）薪火で焼かれるだろう。そして闘技場の真中にひろい畔道⁽¹²⁹⁾を引くことになるのだ。（一四七—一五七）

だからといって、三人の伯父貴にトリカブトを与え（て殺し、財産を横領し）た（ティゲッリヌスみたいな）男が羽根飾りをぶら下げた（ぜいたくな）臥床に乗って運ばれ、そこからわれわれを見下^{くだ}していてよいものだろうか？ 「やつが向こうから来るようなことがあったら、指で唇^{くち}を抑えたまえ。『この男です』と言告げた者も『告発者』⁽¹³⁰⁾にされてしまうだろうから。（それよりか）君は何の心配もなく、アエネーアースと獯^{フン}猛なルトゥリーびと（たるトゥル

ヌス王)を相戦わすことができるし、(129) (パリスに)討たれたアキッレウスにしても、水差しを取りに行つて(帰らず)、さんざ探されたヒュラスにしても、誰にもひどい仕打ちをしやせん。(だが)抜き身の剣ひっさげたも同然のルーキーリウスが怒りに燃えてがなり立てたときはいつだって、罪咎で冷くなった心の持ち主もそいつを聞いて赤くなり、五臓はひそかな罪(の苛責)に汗をかくのだ。(131) こうして怒りと涙という事態になる。だから、ラッパを鳴らす前に胸に手を当ててこうしたことをとくと考えたまえ。(132) 胃をかぶつてしまつては戦争を後悔してもおそいのだ」(と君は忠告するかもしれないが、それなら)、フラーミニウス街道とラティーヌス街道の下に骨灰が埋ま^うまっている(昔の)連中に対して、どこまでやつつけてよいものか試してみるところ。(一五八一—一七一終)。

注

- (1) ここは詩人氣取りの連中が自作を朗読して聞かせる——当時の文学作品の発表方法——のに辟易したユウエナーリスが怒りの反論をはじめるところ。
- (2) 「コルドゥスより貧しい」Cordo pauperior という表現が生まれたほどのヘボ詩人(マールティアーリス二・五七)。「嘆れ声の」というのはあまりにたびたび朗読をするから、という一般的な皮肉と、その作と伝えられる叙事詩『テーセウス(伝説的英雄)物語』が愚作で冗長なことをも諷していると考えられる。
- (3) togatas. ローマ市民の正装たる toga^{トガ}を役者が着て演ずる喜劇。ギリシアの生活をテーマとした劇はギリシア風の pallium^{パルリウム}(*palatium*)を着用したので palliatæ (fabulæ)と呼ばれた。また、後出の「エレギア詩」elegos は、英語 elegy の語源だが、発生的にはともかく、ラテン文学のエレギアは、詩形から名づけられたジャンルで、内容は「哀悼歌」に限らない。
- (4) (6) のオレステースとともに、エウリーピデースが主題とした悲劇(ただし、テイレボス)の主人公たるギリシア神話の英雄。テイレボスはミューシアーの王でアキッレウス(アイわゆる)の槍で傷つき、その同じ槍の鏑で治ったというトロイア遠征のときの話が有名。アガ멤ノーンの子オレステースも、父が母クリュタイムネーストラに殺された話その他を中心にギリシア文学の重

要なテーマとなった。

- (5) 当時の書物は巻物 volumen ヴォルメン である。パピュ羅斯の裏は彩色なれ (七・二三)、裏にまで書いた書物は *opistographi* (Plin. Ep. III, v, 17) と呼ばれた。

- (6) 注 (4) 参照。

- (7) 神女レア・シルウィアが、アルバにあるマルスの聖地たる杜で、ロームルス兄弟を生んだ伝説をいう。以上が Madan の解釈であるが、Mayor, Duff は、コルキスの黄金の羊毛が置かれている杜だとし、この羊毛伝説を長詩 *Argonautica* にまとめたワレリウス・フラックスを諷したものだとしていて、この方が定説のようである。

- (8) シキリア (シタ) の北に七つの岩の島 (ペーリ) があり、その最南のひとつが Hiera (「神聖な島」の意) というウルカーヌスの鍛冶場とされる聖地である。煙や硫黄の気が出ることから来た伝承であろう。この島々に風の支配者アイオロスが結びつくのは『オデッセイア』一〇巻の記述ゆえと思われる。アイオロスはここで風どもを統べると考えられた (ウェルギリウス『アエネーイス』一・五五―六七)。

- (9) ルクレティウスふうな自然の説明でなく、北風の神ボレアースがアテーナイの王女オーレイテュイアを奪った話などのこと。

- (10) この話も『アエネーイス』六・五六六以下に出る。

- (11) コルキスへ黄金の羊毛を取りに行ったイアーソン。

- (12) モーニュコス モニウコス はラテン作家たちがケンタウロスにつけた *maiores pittores* (OId. xv, 46) (「かたき蹄の馬どもを」) から来た Homeric epithet で、ケンタウロスたちとラピテース族の争いの伝承の話に言及したもの。

- (13) 詩の朗読 recitatio レキタイイセ が行なわれた大邸宅を有する貴族で、ユリウス・フロントーと伝えられる (Madan)。

- (14) 家の壁にはめこまれた先祖などの彫像。

- (15) 昔、学校で弁論術を学んでいたころ、教師が罰として振り下ろす鞭に、恐れをなして手を引込めた、の意。「スッラ云々」は、「スッラは独裁執政官の職に就くべきか、私人でいるべきか」という想定で弁論術の練習——これを *suasoria* という——をし、後者の立場に立って発言した経験をいう。スッラが前七九年公事より引退した史事に因む。

- (16) *stula est clementia, cum tot ubique / vaibus occurras, perituae parcere charitae* (17~18) の部分、国原吉之助氏の訳を拝借した。けだし名句であり、名訳である。

- (17) サトゥラの先達ルーキリーリウス（前二世紀）はカンパニアのスウェッサ・アウルンカの人。
- (18) カンプス・マルティウス（「マールスの野」ローマの西北部にあった広場）での戦車競走に因む比喻。ここは「分野」というほどの意味。
- (19) こうした性の倒錯については、六の卷三六六以下に詳しい。
- (20) 身分は高いが、女族アマゾンのような服装をして円形演技場で模倣の狩り *venatio* をしたりした男まじりの女。二・五三、六・二四五以下にもあらわれる。
- (21) この地方の野猪は荒いので有名だった。
- (22) これはリキニウス（またはキンナムス）という名の成り上り者だと言われている。一〇・二二六参照。Duff の示唆するようにキンナムスだとすれば、マールティアリスが、「以前ローマじゅうでもっとも有名だった床屋で、そのうち女主人の贈与金で騎士になった」（七・六四）と諷刺されている人物。
- (23) エウエナリスはたぶんその人生からエジプトを憎む理由があったらしいが、一般にクレオパトラ以来、ニールス（ナイル）河に代表されるエジプト出身者はローマ人の蔑視の対象であった（Mayor）。
- (24) ニールス河口の淫蕩の町カノープス（ギリシア語ではカノーボス）で生まれたクリスピウスという男は、ローマに魚の行商人として来、騎士の身分を得（*princeps equitum* IV, 32）、ドミティアヌス帝の寵を得た。帝に阿諛を示したマールティアリスは彼のことをエウエナリスはごくさしていない（七・九九、八・四八）。
- (25) 紫螺で染める古代に有名な染料の産地。それで染めたぜいたくなマントの着かたも自堕落だというのである。
- (26) Madan は、ふじうのスコリアに従って指輪も冬用、夏用と使いわけたと解しているが、拙訳は Duff に従って、クリスピウスが、夏、指が熱くなるほど重い指輪をはめたことを言うにすぎない、と釈く。
- (27) *gemmae* 詩形の要請で *anuli* にかえたもの。
- (28) *difficile est saturam non scribere*. (30)
- (29) Matho. VII, 129; XI, 34 にも見える三百代言。マールティアリス（一〇・四六）にも、「伊達にものを言いたがる」男として諷刺されている。
- (30) 輪 *leuca* は二人乗り。それを一人で占領している尊大さと、成り上り者の肥大を「いっぱいにおさまって」と表現している。

- (31) 「国家反逆に関する法律」(Tac. *Ann.* I, 72) をティベリウス帝が復活して以来、反逆者を密告した者はその反逆者の財産の四分の一を取得できた(Tac. *Ann.* IV, 20) ので、ローマには産を成そうとして密告者が溢れた。Madan によれば、ここに言及されているのは Marcus Regulus という男で、ドミティアヌス時代に貴族の多数を密告によって罪におとし入れたといふ。
- (32) ベネビウス・ベッサ。同じベネシティアヌス時代の密告者。やゝとしてネローに愛された(Schol. *Massa morio fuisse dicuntur*)。
- (33) メッティウス・カールス。やはりドミティアヌス時代の密告者。倭人でネローに寵を受けた。
- (34) 役者で密告を事とした男。Marius Maximus schol. に *Latinus archimimus* とある。次注参照。
- (35) マールティアアリス・四に「テムメレーや、道化師ラティヌスをごらんになるときの／あのお顔つきで、わたくしの詩をどうかお読みなさい」とあることで判るように女役者。Madan はラティヌスの妻だとしている。
- (36) *summoveant*. 先導吏が行列して行く時の用語。
- (37) 以下、金持ちの老婆と同衾してその遺産をせしめようとする遺産狙い *caprator* を諷したもの。
- (38) *vesica* (VI, 64)。
- (39) *Iustin.* inst. II, 14, § 5 *hereditas plerumque dividitur in duodecim uncias*.
- (40) (41) *caprator* (注(37)) の名。キッローはこゝで詩形上キッローと発音されている。
- (42) 『イーリアス』三・三三「山の谷間で蛇を見て人が飛びのき、ふるえが身体を捕え…」(高津春繁訳)、およびこれをふまえた『アエネイス』二・三七九「げに、荆棘の途を分け行く時、思はず知らず地上に蛇を踏みたる者が、その蛇の怒りて、淡青き喉を膨らませて立向ふとき、不意にをのゝきて逃げ行く如く」(田中秀央・木村満三訳)を引く表現。
- (43) *Lugdunum* (= *clunum* = Fr. *clune*) は今のリヨン。こゝにアウグストゥスを祀った祭壇があり、カリグラ帝がギリシア・ラテンの弁論競技会を行なったが、敗れるとひどい屈辱的な目に遭わされた(Suet. *Calig.* 20)。
- (44) アフリカの地方総督だったマリウス・プリスクスが公金を横領し、西暦九九年人民に訴訟をおこされ、敗訴して追放の罰を受けたが、実際にはなにがともなかったように豪奢に暮らし、公金も属州に返還されずに国庫に没収されたことを述べたもの。
- プリーニウス『書簡』二・一一参照。

- (45) *quid enim salvis infamia nurimis?* (48)。
 (46) 通常は九つから酒宴がはじまる。
 (47) 諷刺詩人ホラーティウスは、前六五年南イタリアのウェヌシアに生まれた。その『書簡詩』二・一一・一二の「日の出前に眼覚めてペンと紙と書卷入れを求める」をふまえた表現。
 (48) *agitem* の (1)「攻撃する」、(2)「扱う」の両義を掛けたもの。
 (49) *Madan* によれば、ドミティアース帝の法律によって、姦婦は遺産相続権を失った、というが、*Duff* は、前一六九年の *lex Voconia* によって女性に相続権が無く、そのため女の後見役の第三者に相続せしめ、この場合は女の夫が「信託ヲ受ケテ繼承スル者」*heres fiduciarius* に当るけれども、ユウ＝ナリリスの当時この法に依然効力があつたか否かには疑問があり、*Friedlander* は、この女に子がないために相続権が無かった (*leges Julia et Papia Poppaea*) と考えている、と注している。
 (50) もちろん「眼が」「覚めている」のであるけれども見て見ぬふりをするため、酒盃に鼻を突込んでいるさまを「覚めている鼻」と表現したもの。
 (51) 十二の功業で名高いギリシア神話の英雄ヘーラクレースを歌った物語詩。
 (52) ヘーラクレースに人食い馬を奪われた神話で有名なトラーク王。
 (53) クレーター島の迷宮。ここに半人半牛の怪物ミノタウロスがいた。
 (54) 背に人工の翼をつけて空を飛び、太陽に近づきすぎて翼が焼け落ちて死んだダイダロス (次注) の子。
 (55) アテーナイの工匠。クレーター島から空路脱出しようとして人工の翼を案出した。注 (54) 参照。
 (56) *praesepe* には「馬小屋」「売春宿」の両義があり、ここは「馬と女に (財産を) 使いこむ」意味だと *Madan* のみ注しているが、一般には、戦車競走に夢中になる *intropiaia* の意。
 (57) 財産を浪費した若者は軍隊にはいって金を作ろうとした。元老院議員も騎士階級も、公けの生活は軍務からはじめたが、前者の場合は *tribunatus legionis* という職務で名目上だけが多かったのに対し、後者においては *equestres militiae* (これに三段階あつた) を実際につとめ、これが金になる役 *procuratores* (属州の) 収税官) となる普通のコースであつた。
 (58) アキッレウス (いわゆるアキレス) の御者の名。
 (59) ムルウィウス橋によってティベリス河を渡り、アリーミヌム (いまのリミニ) に通ずる街道。

- (60) 男装を意味する。なお、ここの「若僧」が誰を諷しているかは諸説があり、はっきりしないが、ネロー帝の御者であったコルネーリウス・フスキスだという説もある。いずれにしても、一九七〇―八〇年代の日本のハイティーンとの類似がおもしろい。
- (61) *tabula cerata*. 略して *cerata* と *tabula* [*tabella*] ともいう。板に蠟を塗り、尖った鉄筆の先で文字を書いたもので、ここでは、にせの遺言書を作るのに用いたもの。
- (62) 当時は印形を指輪にして用いた。捺印する前、いきを吹きかけるので「濡らした」というのである。
- (63) 友人の遺言書作成に立会って、自分の得になるように作った(蠟引板の(注(61)))。文書を挿入したことをいう。これはネロー帝のお気に入り、伯父を三人毒殺し、にせの遺言書で遺産を横領したティゲッリヌスという男のことをさすのだという説がある(二〇・三三六行参照)。
- (64) ホラティウスのパトロンドったアウグストゥスの寵臣。ただし、銀時代のラテン文学では、マエケーナスは「文弱」の代名詞である。
- (65) 「六人乗り」*hexaphoron* から、まもなく「八人乗り」*octophoron* を用いるようになるだろう、という成り上がり者への皮肉。
- (66) 世間の悪事が何でも判る、という意味。
- (67) 今日なら「ノート」というほどの意味。注(61)参照。
- (68) 「四つ辻」にいと、を受けた表現。
- (69) クラウディウス帝の妃アグリッピナをさす、といわれる。彼女は連れ子のネローを帝位につけるために夫を毒殺したと伝えられている。
- (70) 南カンパニアの町(いまのカルヴィ)産の名酒。
- (71) ユウエナーリスに頻出する毒薬(三・四四、六・六五九)。
- (72) ガッリア出の毒薬使いの女。ネロー帝を助けて、ブリタンニクスやメッサリーナを毒殺した。
- (73) *bandadys* として「民衆の評判なんか物ともせず」という注釈があるが、*per populum* は葬列がフォルムを抜けて城外の埋葬地へ進むさまを述べたもので、*Duff* によってこう訳した。
- (74) 毒のために黒くなったもの。
- (75) キュクラデス群島の一、エーゲ海上の小島で、帝政期ローマの流刑(*deportatio in insulam*)地で、水に乏しかった。一〇、

一七〇にも見える。

(76) たいてい処刑された。

(77) *probitas laudatur et alget.* (74)。

(78) 女たちが真珠にうつつをぬかしたように、ローマの男たちは象牙その他で高価な卓タイプルを好んで持ちたがった。

(79) マールティアリス(八・五一)にも、「浮彫りになっているのはテーバイのプリクソスの(乗って逃げた) アイオリアーの黄金の毛うるわしき牡羊」とある。牡羊はバックス神の聖獣である。

(80) 「深紅の縁取りのついた(少年用の) トガを着た」が原意。

(81) *facit indignatio versum.* (79)。

(82) 不詳。いずれは当時の諷刺詩人か。

(83) プロメテウスの子で、エピメテウスの娘ピュッラーを娶った。ゼウスが大洪水で人類を滅ぼそうとしたとき、箱舟に乗って妻とともにパルナッソス山に着いた。そしてゼウスに犠牲を捧げて神託を乞い、「母の骨を背後に投げよ」と言われたのを、母なる大地の骨、つまり石であると解し、石を拾って投げたところ、彼の石は男に、ピュッラーの石は女になって、人類は滅亡をまぬかれた。

(84) *quidquid agunt homines, vatum timor ira voluptas / gaudia discursus, nostri farrago libelli est.* (85~86)。

(85) サートゥルナリアの祭り以外は骰子の賭博は禁じられていた。

(86) 庇護者が「挨拶」に来る被護民に毎日与えた「手当」で、籠に食物などを入れたが、現金を以てこれにかえるようになった。

(87) 「挨拶」には、ローマ市民の盛装たるトガを着用しなければならなかった。

(88) 庇護者のこと。

(89) ローマの伝説的な始祖アエネアースがトロイの王族であったことから。

(90) ユエナリスのころ、*praetor urbanus* と呼ばれて、市長のような権限をもっていた。そういう連中すら富める庇護者パトローヌスを持つことがあった。この「親分乾分関係」が古代ローマの身分関係に複雑に関わっていて、或る人に対し「乾分」である者が、べつの人には「親分」でもありえた。

(91) 「挨拶」における自分が確保した順番。

- (92) 東方の奴隸は耳に孔をあけられた。「お上品な」*mollis* というのは、これがローマで柔弱な風習と見られていたためである。もともと *mollis* を字義通りに取って「柔らかな耳にあいてる孔」の *hypallage* とする解釈も可能か (Madan)。
- (43) つまり、この解放奴隸は、貸し店を五つ持っていて、その収入があるわけである。
- (94) 騎士身分を買える金額。
- (95) ローマの高官は深紅の広い縁取りのついたトガを着用した。
- (96) ラティウムの海岸町 (いまの Torre Paterno)。
- (97) 落ちぶれたローマの貴族の家柄。その一人はネロー帝から年金を貰って生活していた (Tac. Ann. XIII, 34)。
- (98) 富を以て名高かったクラウディウス帝の解放奴隸。ネロー帝に殺された (タキトゥス『年代記』一二・五三)。
- (99) もとゲルマニア出身の捕虜で、カエサルとアウグストゥスに仕え、巨富を積んだ。
- (100) 外国から連れて来た奴隸が売りに出されるときは、素足にチョークで印をつけて、家付奴隸 *vernae* と区別した。
- (101) 護民官の身分は *lex sacra* (Liv. II, 33) により犯すべからざるものとされた。
- (102) ローマ人は「平和」「信義」などの抽象概念を神格化してこれらに神殿を建立してきたが、いまだ「金銭」に対してはなにもしていない、の意。
- (103) カピトリウムの近くにあった「協和」の神殿が建てられてい、屋根にこうのとりが巢をかけていた。通行人は神殿の前を通るとき祈りを捧げる習慣があった (オウィディウス『哀歌』二・二九一) から、その祈りに応えて鳥が啼くのである。
- (104) v. 114 の *habitas* は別本は *habitāt*、これを採ると、「金銭」が主語になる。
- (105) 注 (86) 参照。
- (106) 「挨拶」にトガと靴は欠かせなかった。
- (107) 施し籠の相場。
- (108) 夫は妻の分までもらおうとして妻を轎に乗せて連れ歩くのである。
- (109) 女房の名。「ガッリア女」の意。
- (110) 早朝の挨拶に続いての被護民のしごとは、午前八時ごろからフォルムの法廷ではじまる裁判に、庇護者の供をする、という日課 (*deductio in forum*) があった。Madan が「法廷弁論を聴きについて暇潰しをする」と解したのは正しくない。

- (11) Forum Augusti にあった象牙のマボロン像の前で裁判が行なわれたから「法に明かい」 iuris peritus と呼ばれた。
- (112) フォルムの主な建物は Mars ulior の神殿で、その柱廊には、アウグストゥス帝が法の範としたようなローマの凱旋將軍たちの像が立っていた。もっともその中には、ユウェナリスが軽蔑したような外国人あがりの將軍もいたのである。次注参照。
- (113) ティベリウス・ユリウス・アレクサンデルを暗に指す。彼はユダヤ人で、ローマの騎士身分を獲得、西暦四十六年ユダヤの行政長官、六十七・七〇年エジプトの地方長官となった。
- (114) ローマ人の彫像の台座には、praenomen, nomen, cognomen と、官職の経歴 cursus honorum が記され、これを titulus (冠、title) と言った。
- (115) Cf. in me veniat mictum atque cacatum Iulius (Petr. 71). ただし、Madan は一つの解釈として「その像にはただ小便することさえ許されていない」「すなわち、こういうつまらぬ人物の像にも保護が与えられている、という皮肉、を挙げている。
- (116) 一日の行事を順に述べるはずだったのが一転して食事のさいの庇護者の利己的なありさまへの諷刺にかわっている。
- (117) 前は複数だが huic homini の感じ(樋口)。
- (118) 施し籠の百クワドランスがこれで無くなるのである。
- (119) ふつう宴会は一つの臥床に三人ずつ横臥するのを、ここでは独りじめにするのである。
- (120) Luxuriae sordes : *oxymoron*.
- (121) gula. 直訳は「のど」。
- (122) crudus. 別本に従って crudum を採れば「消化していない(孔雀を)」となる。
- (123) 遺産にありつけないから。「友人」は皮肉。「喝采され」plaudendum は「悼まれ」plangendum の反語。
- (124) Duff に従う。「あらゆる悪徳が頂点に達した」という解釈もあって一定しない。
- (125) ≪: ≫ は、初期の諷刺詩人ルーキウス・ユリウスの引用と思われる。プーブリウス・ムーキウス・スカエウオラ(ティベリウス・グラックスの友人だった執政官)への攻撃。
- (126) ソフォーニウス・ティゲッリヌス。ネローの寵臣で、悪辣を極め、西暦六十九年オトーに自殺を命じられた。
- (127) 君が殺され、死体を引きずられて、の意。ネローは大火の原因をキリスト教徒に帰し、衣に油をしみこませたのをきせて、焼殺した。

(128) ウェルギリウス『アエネーイス』十二・九一～九以下の場合。

(129) トロイアの王子パリスは、アキッレウスがメムノーンを討ち、トロイアに迫るや、スカイアイ門の傍で、不死身の彼の身体のだだ一つの急所たる踵を射て彼をたおした。

(130) ヘーラクレースは侍童の美少年ヒュラースを泉に水汲みに行かせたが、水のニンフたちがヒュラースの美しさに魅せられて彼を水に引きこんだ。

(131) *inde ira(e) et lacrimae.* (168) *hinc illae lacrimae* (Ter. *Andr.* 126) と同じく諷的な表現。

(132) *galeatum sero duelli / paenitet.* (169～170).

(133) 注(59)参照。

(134) アウソニウス街道ともいう。アッピウス街道とワレリウス街道の間を走り、アッピウス街道に合する。

(134) ここに出る二つの街道は、傍に貴人の墓が多かったから、昔の人にかこつけて諷刺をしようというのである。なお、十二表法はローマ市内に人を葬ることを禁じていた。

二の巻

(1) (古き世に廉直なりし) クリウスの氏を気取りながら、(その実は)酒神バウコスの祭のような生きようをしている連中が、なにやら道義のことを図々しく口にするたびに、このローマからサウロマタエ(2)の民棲ある地、氷張る大洋のかなたへ逃げだしたくなる。まず最初に連中ときたら学がない。そのくせ(家中)至る所(3)(哲学者)クリューシッポスの漆喰の像

でいっばいだ。というのは、もしもアリストテレースやピクタコスに似た像を買い、本棚にクレアンテースの原像を置いておくようにするなら、そいつがこうした連中のうちじゃ一番立派な、非の打ちどころのない奴ということになるから――顔⁽⁶⁾というやつ、全然信用がならない。だっていったいどの町に、難しい顔をして、そのくせスケベエ野郎が溢れていないというのか？（たとえば）お前自身ソークラテースを信奉すると称しながら稚児さんで、もつとも悪名高き「穴」でいながら、（世の）醜きことどもを咎めだてするというのか？ まったく毛だらけの手足と、腕中に生えたかたい剛毛⁽⁷⁾はさぞかし剛毅な精神を持っているだろうと思わせるけれど、（その実は）すべすべした尻の穴から医者⁽⁸⁾が笑いながらとび出た疣瘡を切り取る始末なのだ。こうした手合は稀にしか口を利かず、沈黙が大いにお好きで、髪も眉まで届かぬ（男らしい恰好だ）。だから（男色家の）ペリボーミウスのほうがもっと正直で堂々としている。顔つきといい、歩きぶりといい、明らかに病的で、わたしの意見ではこの男がこうなのは運命のせい（で仕方がないの）だ。こういう連中の単純さは（むしろ）哀れで、こういう連中は気違いじみていることだけで勘弁できるのだ。だが、もっとタチが悪いのはヘーラクレースのことばで、そうした悪癖⁽⁹⁾を攻撃し、美德について語りながら（実は）お尻⁽¹⁰⁾を振り動かしている連中だ。「この俺が尻⁽¹¹⁾を振っておるお前に、セクストゥスよ、敬意を表するというのはか？――と、（同じく男色の）悪名高きワリーッルスが言う――どれほど俺がお前より下劣だというのだ？」がに股の奴を足の真直な奴が、アエティオピア人を白んぼが嗤うのはいい。（だが）誰がグラックス兄弟が謀反について文句を言うのを我慢できようか？ もしも盗賊⁽¹²⁾がウェッレスの、人殺しがミローの、お気に召さず、クロードイウスが姦夫を、カティリーナが、（共謀者の）ケテーグスを、非難するとしたら、（また）もしスッラのブラック・リストにその弟子（ともいふべき）三人が文句をつけるとすれば、誰が天と地とを、海と陸とを、ごったに（するようなデタラメを）していないというのか？ ついこ

の間悲劇的な同衾で漬れたばかりというのに、万人が、いやさ⁽¹⁹⁾（姦通した）ウェヌスとマールスさえ、恐れるほどの、（姦通を禁じた）苛酷な法律を復活したお人も、こういった一人だ。なにせそのとき、（姦の）ユーリアは、多産な陰門からあれほどの胎児をひり出し、伯父にそっくりの肉塊を流したのだもの。だから悪徳の極致みたいなやつらが、（廉直な）スカウルス家の人々のような顔をした（偽善）者どもを軽蔑し、咎められると（あべこべに）食ってかかるというのも、もっともで、当然のことではないのか？（一一三五）

こうした（偽善的な）連中のうちの或る厳めしい顔つきのご仁が、ああもしょっちゅう「ユーリウス法よ、どこへ行った？ 眠っておるのか？」と叫ぶのを、⁽²⁴⁾ラローニアは我慢できなかった。そうして（このラローニアが）ニヤニヤしながら（言うのには）、「あなたみたいなお方を道義（の問題）に立ち向かわせるなんて、まったく幸福なご時世だわ。今こそローマに廉恥（の心）を持ってほしいわ、なにせ三人目のカトー⁽²⁵⁾が天降って来たんですものね。でもね、あなたの（哲学者気取りの）毛だらけな頸からいい匂いを発散させているその香料はどこで買ったの？ 恥しがらないで（買った）店の主人（の名）を教えないな。でももし法令や法律を起して来るのなら、なににより先にスカンティウス法を呼び出して来なさいわ。なににより先に殿方に目を向けて徹底的にお調べなさいな。だって男は（女より）もっとたくさん（悪いことを）やっているのに、数にものを言わせ、盾をつらねて相並んだ方陣さながらに守りをかためているんですものね。軟派の間の一致協力は大したものよ。あたしたち女性の中にはこんな厭うべき例は一つだってないでしょうよ。（娼婦の）⁽²⁸⁾メーディアはクルウィア（の股間）を舐めやしないし、フローラだってカトゥッラを舐めやしない。（なのに）ヒスポーは（男のくせに）若者の下になり、⁽²⁹⁾両方の病気で蒼い顔をしているのだから——。いったいあたしたち（女）が訴訟を起したりして？ 市民法を知っていて？ はたまたあなたがた（男性）の法廷をな

にかがなり、たてて騒がすことがあって？ 角力をとったり、（レスラー用の）強化食のお肉を食べたりする女はごく僅かしかないわ。（それなのに）あなたがた（男）ときたら、羊毛を紡ぎ、織物が仕上がれば柳の籠に戻す、男のくせに細い経糸で脹れた紡錘をペーネローペーより上手に、アラクネーより達者に廻してのける、まるで主人と寝た（ふしだら奴隸）女が髪ふり乱して罰にお仕置の台木に坐らされてやるみたいなのを——ヒステルがなぜ遺言書にただ一人解放奴隸の名前だけを入れたか、生きているじぶんなげたくさんの品を処女妻に遣ったかは周知のこと。大きなベッドに三人めとして眠る妻女はお金持になるということね。（娘さんよ）、あなた（がた）はお嫁に行つて、そして黙っていることね。（亭主の）秘寄を守れば（耳飾り用の）円筒形の宝石がもらえてよ。すべてこうしたことがあるというのに、あたしたち（女）について、ひどい判定が下せて？ 検察は鴉に赦しを与え、鳩を苦しめてゐるのだわ」（三六—六三）

（こういう）ストアーの徒（と称する輩）も（ラーローニアが）はつきりした本当のことを堂々とたまうのには、あわてて逃げだした始末。だつて、ラーローニア（の言うこと）になんの偽りがあるね？ だが、クレイテックスさんよ、あなたが透きとおつた着物を着、この着物を公衆の前に見せびらかしてびっくりさせながら、（姦通の法を破つた）プロクラダのポツリッタ（だのいう人妻ら）を（法廷で）声高らかに弾該しとるというのでは、他の（えらい）方々もいったいなをしないだろうか？ （なるほど）ファブツラは姦婦で断罪さるべきだし、お望みなら、カルフィーニアだつてそうしてもよい。（だが）そういう（あなたのような）着物は有罪になつたつて（彼女らは）着けはしまひよ。「だが、この燃える七月、わしは暑いのだ」（それなら）裸で裁判をなされ。気違ひのほうがまだみっともなくないぞ。何たるいでたちで、あなたが法規法案を提出し、（戦野から）凱旋したばかりの、傷もまだ生々しい民衆や、鋤を置いて来た山村の一般庶民に聞かせたか、まったくいいさまだ！ 裁判官の身体にあ、いったさまを見て、いったい

なにごとを叫ばずにいられよう？（一般人たる）証人にだって透き通った着物^{トガ}は似つかわしいかどうか訊^ききたいものだ。切れ者で、仲々倒れない、自由の士たるあんたが、クレイティクスさんよ、すっかり透いて見えるとはね。伝染がこ

うした墮落を招いたのだ。そしてさらに多くの者の上に（墮落を）招くことだろう。ちょうど農場でただ一匹の豚の疥癬^{ひびん}のために畜群全体が斃れ、また葡萄⁴²が他の葡萄を眺めて黒い斑点を帯びるようなものだ。（六四—八一）

この着物よりさらにひどいことを早晚あんたは臆面もなくやり出すだろう。だれだって突然に醜惡の極に達したわけ

ではないのだ。家で（ひそかに女装して）長い飾り紐を額に着け、頸全体に（宝石の）首飾りを巻き、さらに若い牝豚⁴⁴の乳房と大きな混酒器^{クライトル}で「貞潔⁴⁵の女神」の意を迎えるような連中が、だんだんあんたの仲間になってゆくだろう。却っ

て、習慣は顛倒して、女は遠く追ひ払われて城内にはいれず、男子にだけ（この）女神の祭壁が開放されているのだ。

「去れや、不敬の女ども——と叫びが上がる——ここでは笛吹き女はいかなる角笛^{ふえ}にても悲しき音をば立てぬのじゃ」⁴⁶こうした秘密の淫らな祭りをば、アテーナイの（異神⁴⁷）コテュットーを（長い狂乱もて）いつもながら疲れさせる祭司^{パプタイ}も、薪火^{たき}かかげて取りおこなったのだ。こっ⁴⁸ちでは煤に水をふくませ、曲ったピンを使って眉を染めて長くし、（痛さに）

眼をパチパチさせながら上げて色どりをする。（かと思えば）あっちでは怒張したペニスの形をしたガラスの盃で酒を

飲み、黄金色^{きん}のヘア・ネットにたっぷりした髪を押しこみ、青い格子縞の着物か薄緑のすべすべしたのを身に着け、お

付きの者の主人の（崇める）ユーノー⁴⁹（女神）にかけてものを誓う、というありさまだ。（また）こっちでは鏡を手⁵⁰にしているが、この鏡というやつ、淫蕩なる（皇帝）オトーの持ちもので、アウルンカのアクトルからの分捕り品よろしく、

はや（出撃の相図として）旗幟を挙げよと命ずるそのとき、こいつでオトーは武具つけたるおのが姿をうち眺めたものである。内乱の武装品に鏡とは、まったく新しき年代記、近年の記録に特筆さるべき事柄だ。⁵¹（皇帝）ガルバを殺し、

(わが) 肌を大事にすることが最高の将師にふさわしいとて驚くには足らぬ。⁽⁵²⁾ ベーブリアクムの戦野にあつて皇居^{パライティウム}の戦利品を求め、⁽⁵³⁾ メリケン紛を潰して指で顔に塗ることが最高市民(たるオート)の剛毅(のさま)なのだ。こんなことは、アッスュリアの国の箴つけたる(女王)サミーラミスも、またアクティオンで艦上にあつて心痛めるクレオパートラーだつてやらなかったことだ。ここには言葉遣いに対する何の恥らいもなければ(宗儀としての)食卓に対する尊敬の念もない。ここにあるのはけがらわしい(女神)⁽⁵⁵⁾ キュベレーの、潰れた(女のような)声でもの言う放逸のさま、神懸りした白き髪の人である聖儀の祭司、といったところで、これがまた口腹の大欲の、稀にみる、記録に価する実例で、(その方面の)教師に雇つてもいい男だ。しかしもうプリュギアの風俗通りナイフで成り余れる肉を切り取つていい時なのに、なにをぐずぐずしているのか？(八二—一六)

グラックス(なる男)は四十万セステルティウスの持参金を、⁽⁵⁶⁾ 曲つたラッパだつたか、それともこの男まっすぐなラッパで奏でていたか(忘れたが)、ともかく笛吹きに遣つた。書類に署名がされ、「おめでとう」が言われ、老大な数の宴客が席につき、旦那(になった笛吹き師)の胸に新妻(よろしくグラックス)が横になった(という次第だ)！ ああ、国のお偉方^{えらひ}よ！ われわれに要るのは、監察官^{ケンセル}なのか、それとも(お祓いの)⁽⁵⁷⁾ 腸卜官なのか？ まったく、女が仔牛を産むとか、牡牛が仔羊を産むとかしたら、君はもつと戦^{おの}いて、大変な怪事だと思ふのかね？ (仕掛をした)秘密の革紐でこつくりするようにした聖像を運びながら、(軍神マールスに因む)⁽⁵⁷⁾ 円盾を持って汗をかいて(踊りながら行列した)グラックスという、この、かつてサリー宗団の祭司だつた)男が(今では)金襴の裾飾りだの、⁽⁵⁸⁾ 長衣^{スト}だの、(花嫁の)緋のヴェイルだのを着ているのだ。(一一七—一二六)

おお、(ローマの)都の父(マールス神)よ、ラティウム⁽⁵⁹⁾の牧人らにどこからこれほど大きな邪悪が(はいりこんだの

だ）？　どこから、進軍⁽⁶⁰⁾之神よ、このような醜い欲情が汝の子孫に感染したのだろう？　見るがいい、素性も富もれつきとした男が（嫁入りよろしく）男の手に渡されているのだ。それでいて、（マールス神よ）、汝は（憤りに）兜を震わすでもなく、槍先で大地を打つでもなく、父⁽⁶¹⁾（神なるユーピテル）に向かつて唧^かつでもないのか？　しからば行きて、汝のなおざりにしている敵⁽⁶¹⁾しきカンプス（・マルティウス）の広き原へと退くがよいぞ。「わたしや明日クウィリース（丘）の谷（にあるロームルスの神殿）で夜明けに果さにやならぬ儀式^{つとめ}がありましてね」「お儀式^{つとめ}って何の？」
「どうしてそれを訊くんですね？　なに、友人のお嫁入りでして、大勢⁽⁶²⁾招くわけじゃありません」ただ生命^{いのち}永らえてさえいりゃ、こうしたことはきつとなされ、それも公然となされ、しかも公文書に報告されたがりすらするだろう。そうとはいうものの、こうして「お嫁に行く」連中には大きな苦悶⁽⁶⁴⁾がつきまとう。というのは、お産⁽⁶⁴⁾ができず、従って子供を産んで亭主をひきとめるわけにゆかないからである。けれども、自然が（彼らの）心に、肉体に対するいかなる力をも与えないからいいのである。彼らは子もできずに死ぬのであって、肥^{ふと}ったリュデーが調合した（妊み薬）の小箱を以てしても彼らには役立たないし、敏捷⁽⁶⁶⁾なパーンの祭司に掌をさしだしてもしかたがないことなのだ。（一一七—一二二）
⁽⁶⁷⁾　こうした狂態よりさらにひどいのが、下着^{トウエカ}をつけ、三叉戟をもった（貴族の子弟）グラックスで、（卑しい）剣士になって闘技場の中央に逃げまわったんだが、この男たるや、カピトリーヌス、マルケッルスの家柄、カトウルスやパウルスの子孫、ファビウス家、貴賓席で見物するようなおよその人々よりも素性がよいときている！　こうした（貴族の子弟）連中に加えて、グラックスが網を投げたそのときの興行主自身も連れて来てよからう。（一四三—一四八）
　なにか靈魂というものがあるとか、地下の冥界^{ミク}、舟の竿があるとか、三途^{ステユクス}の川の烈しい流れに黒い蛙どもがいてとか、さらにあんな何千という者が一艘^{そう}の渡し舟で瀬を渡るとか、こうしたことは子供だって信じていない、まだ一文払って

湯に行かない（四才以下の）子は別として――。けれども君は真実だと信じたまえ。この世から上に述べたような魂が冥界に行くたびに、クリウスは、⁽⁷⁰⁾両スキーピオーは、どんな気がするだろうか？ また、⁽⁷²⁾ファブリキウスは、⁽⁷³⁾カミッルスは、⁽⁷⁴⁾クレメラの（河辺で戦死した）軍団は、⁽⁷⁵⁾カンナエで全滅した若者たちは、あれだけ多くの戦争に散った魂は、（どんな気がするだろうか）？ もし何とか松明と硫黄が手にはいれば、もし⁽⁷⁶⁾（水に）湿らせた月桂樹の枝があるなら、これらの魂はきつと浄められたいと希うだろう。ああ、われわれはひどいことにここまで追いこまれているのだ。なるほどわれわれは⁽⁷⁷⁾ユーウェルナの岸、あらたに征服したオルカデス（群島）、そしてごく短い夜にて足りる⁽⁷⁸⁾ブリタンニアのかたにまで兵を動かした。けれども、勝者の都（ローマ）でいま民衆がやっているようなことは、われわれに敗れた人々とてもやりはしないのだ。そりや⁽⁷⁹⁾あ他人の話ではアルメニア人のザラケースなる者、（ローマの）青年の誰よりも柔弱なやつで、⁽⁸⁰⁾某長官の激情にほだされて身を任せたそう。な。（だがこの）取り引きがどんなことをやるものか見るがいい。（青年は）人質として来たのに、ここ（ローマ）では一人前の大人にされてしまう。というのは、若者がちよつとでも長く（都に）とどまるとよいとなると、⁽⁸¹⁾けつして（同性）愛の相手にこと缺くことはないだろうから。股引きや懐剣や馬勒や鞭は打棄られ、かくして彼らは⁽⁸²⁾アルタクサタにローマ高官の風俗を持ち帰るのだ。（一四九―一七〇）

注

- (1) 初期ローマの名門。クリウス・デンタートゥスが代表的な人物で、三度執政官に選ばれた。
- (2) サルマタエ族とも言い、北方に住んでいたスラヴ系の蛮族。
- (3) ゼーノーンの流れを汲むキリキアー生まれのストア派の哲学者。
- (4) ミテュレーネーの哲学者でギリシア七賢人の一人。

- (5) アッソスのストア哲学者。ゼーノーンの弟子で、クリュシッポスの師。
- (6) *frontis nulla fides*. (8)
- (7) 「男に長い髪があれば彼の恥になる」(コリント前書一一・一四) 当時、長髪の男は男色家と考えられた。
- (8) 当時悪名高かったであろう。
- (9) ヘーラクレースはまだ若いとき、美德と快楽といずれを選ぶべきか迷っていたが、そのときこの二つを象徴する化身の女が現れてそれぞれ説得しようとした。そしてヘーラクレースは結局美德を採ったという(Xen. Mem.; Cic. De off. I)。
- (10) 男色家の名。
- (11) アフリカ南部の黒人。
- (12) 前二世紀の政治家で、ガイウス、ティベリウスの兄弟。農地法の問題で大いに騒擾をまきおこした。謀反の張本人が謀反に不平を言うのはおかしいというわけである。
- (13) シキリアの地方総督。所管の地を擄取し私服を肥やしたためにキケローによって弾劾された。
- (14) 前五二年、プーブリウス・クロードイウスと剣闘士の隊長ミローの政争で、クロードイウスはミローに殺された。キケローはミローを弁護したが成功しなかった。(15) 参照。
- (15) キケローの政敵で、キケローの追放を策した男。前六二年、女に紛してカエサル家で行なわれていた男子禁制のボナ・デアの祭儀に忍びこみ、カエサルの妻ポンベアや自分の妹との情事など、その方面の悪名も高かった。キケローが戻って間もなくミローに殺された。
- (16) 前六三年ローマ転覆の陰謀をはかった貴族。
- (17) カティリーナの共謀者。
- (18) 独裁執政官ルキウス・コルネリウス・スッラは多くの人間をブラック・リストにのせ、殺したり追放したりしたが、これを真似たのが第二次三頭政治のオクタウィウス、アントーニウス、レピドゥスである。(Madian は第一次三頭政治のカエサル、ポンペイウス、クラッススもこの「三人」に含めている。)
- (19) 女神ウェヌス(アプロディーテー)は、ウルカーヌス(ヘーパイストス)の妻でありながら軍神マールス(アレース)と情を通じ、夫に捕えられた。() 内はギリシア神話。

- (20) ドミティアース帝のことを諷したもの。彼はアエリウス・ラミアの妻ドミティア・ロンギーナを奪ったほか、弟ティトゥスの娘で、サビーススなる者の妻ユーリアと通じ、サビーススを暗殺、ユーリアは堕胎薬のため死んだ。それでいながら、一方ではユーリウス・カエサルが制定し、アウグストゥスが強化した姦通禁止令を復活、これに背いた者を多数死刑にした。この言及が、ユウエナリスなる作者の時代判定の根拠の一つとなっている (Ramsay, p. xi)。
- (21) キケローの弁護の対象となったアエリウス・スカウルスなどを出した共和制末期の名家。
- (22) だれのことか、よく判らない。
- (23) ユーリウス・カエサルが制定し、アウグストゥスが強化した、姦通を禁止、結婚を奨励した法律。ユウエナリスのころには有名無実になっていた。
- (24) 当時の世相に批判的な witty な女であろう。マールティアリス二・三二に同名の女が出てくる。
- (25) 厳肅を以て鳴った「監察官」カトーと、これまた道義心ある人として共和制に殉じたウティカのカトーの二人。ここでは、この自堕落な男を「三人目のカトー」と呼んで嘲笑している。
- (26) 前の「眠っておるのか？」に引掛けた表現。
- (27) 護民官スカンティースス・フリーキニウスが制定した男色を禁じた法律。
- (28) Madan ではなく Taedia、Guido Viali 校注版では Vedia となっている。以下、カトゥッラまで娼婦の名。
- (29) 男色・女色の双方。
- (30) オデュッセウスの妻。夫の帰りを待つ間、求婚者たちを退けるため、夜間に織物をほどこいて昼またこれを織る、という作業をつづけた。
- (31) リューディアの女。織物の名手で、アテーナー女神と技を競い、敗れて自殺、蜘蛛に変身した。
- (32) 男色家の名。
- (33) 自分の男色を隠すための妻への口止め料。
- (34) 妻はめとつても触れないわけである。
- (35) ヒステルと、男色の相手と、妻とが眠るため。
- (36) dat veniam corvis, vexat censura columbas. (63) 諺にもなった一句。

- (37) ローマの名家メッルス家を暗にさす。クウィントゥス・メッルスは、クレータ征服に因んでクレイティクスと呼ばれた。そういう名門の子孫ともあろう者が、の呼びかけ。
- (38) 2. 37 に出たユーリウス法(注(23))。
- (39) つぎのカルフィーニアとともに、当時世上を騒がした姦婦の名であろう。
- (40) 前出の「透きとおった着物」のことであるが、姦通した女は長衣ストッパを着ず、トガ着用を命ぜられたことをふまえている(*cf.* Hor. S. II, i, 63 *togata*)。
- (41) *μήρος* δ *σώπος* ἐκείνης を標榜したストア哲学を看板にしていたのを皮肉ったもの。
- (42) 当時の俗諺に *uva uvam videndo varia fit* 「葡萄は他の葡萄を眺めることにより斑になる」とあり、葡萄が病気になる原因と考えられていた。
- (43) *nemo repente fuit turpissimus*. (83)
- (44) *Plin. N. H. XI, 84 antiqui sumen vocabant abdomen*. (昔は(豚の)乳房を「腹」と呼んだ)に於ける。
- (45) ボナ・デア *Bona Dea* はファウスの妻と言われ、貞潔の神で、この祭儀には男子禁制であった。ここは注(15)に述べたクローディウスの所行に言及したもの。
- (46) ウェルギリウス『アエネーイス』六・二五八の *procul, procul este profanii* 「不敬の者ら、離れてあれ」のパロディ。
- (47) もとトラケーの女神。ローマのボナ・デアと同じく、アテナイで夜、淫らな狂乱の祭儀を以て崇められた。
- (48) 以下、東方系と思われる女の風俗が多い。それを男がやっているところに墮落が見られるわけである。
- (49) ふつう男はユーピテルかヘーラクレースにかけて誓いを立てたものである。
- (50) 『アエネーイス』一二・九四のパロディ。ルトゥラー族の王トゥルヌスは、アエネーイスの友でカンパーニアのアウルンカのアクトルから槍を奪ったが、オトーは槍の代りに鏡を誇る、というのである。
- (51) オトーは、自分を後継者にするとして果さなかったガルバ帝を殺した。
- (52) クレモーナとウェーローナの中間の地。ここでオトーはウィテッリウスに敗れた。
- (53) ローマ婦人の化粧法。ロバの乳で溶いたという。六の巻注(225)参照。
- (54) いわゆるセミラミス女王。

- (55) 狂乱の祭儀を以て知られた東方系の女神。この信仰が一時ローマで流行した。
- (56) 「曲ったラッパ」は cornua (ホルン)、「まっすぐなラッパ」は tubae (トランペット)で、いずれも金属製で、軍隊で使われた。cf. Ov. M. I, 98.
- (57) スマ王の世に、或る日、天から盾が降って、「この盾を失わぬかぎり、国は強大であろう」という声がした。スマ王はそこで似た盾を十一作り、軍神マールス(ローマの始祖ロームルスの父とされた)の祭司サリー Salii 十二人を設け、その保管に当らしめた。マールスの祭には、サリー宗団はこの円盾や他の聖物を持って、市中を踊り歩いた。そういう古代の聖職者が今では遊蕩に耽っている、という趣旨。Salii の名は salio「跳びはねる」から来ている。
- (58) 原語は longos habitus「長い衣服」で、女の服装であつた stola のこと。
- (59) ローマ人のこと。
- (60) Gradivus はマールスの呼称の1。gradiuus「揺る」から来たとも、「進む」gradior から来たともいう。一応後者に従つて訳した。
- (61) ティベリス河沿いの広場で、軍事教練が行なわれた。
- (62) nubit amicus, nubo は「嫁ぐ」で、女に用いる語。男は (uxorem) duco「めとる」が普通だから、不自然なわけである。
- (63) おそらくスカンティウス法(注27)を恐れてであらう。
- (64) 子供ができないことは多く離婚の原因となつた。ここは男だから当然である。
- (65) 薬の調合を事とした女の名。
- (66) もと牧人の中から選ばれたパーン神の祭司を Luperci と言ひ一定の日に山羊の皮をまといつて pomerium という空地の周りを走り、出遭う女の誰彼となく、持っている草紐で打って、多産の呪術を行なつた。ついでながらパーンの祭りを Lupercalia と言ひ、これはパーンに羊たちを狼から護つてもらう祈禱をするもので、dies nefasti(忌日)に行なわれ、また二月の裁判のない日にも行なわれた。二月 Februarius が februo「浄化する」から来ていることでも判るように、この祭りは本来祓いの祭りで、供儀は山羊と一匹の犬を以てし、祭司はこれらの血のついた刀を貴族の子二人の額に触れ、他の祭司が羊毛を乳に浸して、額の血をぬぐいとり、全員裸になって街を走りまわるわけで、草紐で打つてもらうために女は両手をさしたのであつた。シニクスピア『ジュリアス・シーザー』一幕二場にもこの情景が出てくる。

(67) 以下、貴族の子弟が剣闘士になるといふ乱行が諷されている。三叉戟 *fuscina* を持つ剣士は *retarius*、これと闘う相手は *mirmillo* または *secutor* と呼ばれた。*retarius* は *fuscina* と網 *rete* を持つ *mirmillo* に挑み、後者は盾と鎌を持ち、兜に魚の印をつけて相対した。*retarius* は攻撃しそこなうと逃げて間をかせぐので、これを「追う」*sequi* から、後者を *secutor* 「追手」と呼んだ。

(68) 以下、ローマの歴史を飾る名門の家柄の名が挙げられている。

(69) 催しものの興行は普通 *praetor* であるが、ここでは暗にドミティアヌス帝が諷されている。

(70) クリウス・デントアトウス。注(1)参照。

(71) ハンニバルを破った大スキピオー・アフリカヌスと、ヌマンティア、カルターゴを亡ぼした小スキピオー・アフリカヌス。

(72) エーペイロスのピュッロス王を破った執政官ガイウス・ファブリキウス・ルスキニウス。

(73) 追放された身でありながら、危急に際してローマをガッリア人の侵略から救った英雄。

(74) トスカーナ地方の河(いまのラ・ヴァルカ)。その軍団とは、ウェーイー族に対して戦い、玉砕した三百人のファビウス氏のこと。

(75) アーブーリアの村。ローマ軍がハンニバルに破れた。

(76) お祓いを受ける者は水に浸した月桂樹の枝から水を振りかけられた。

(77) いまのアイerland。もっとも、その史実はない。

(78) いまのオークニイ諸島。クラウディウス帝がローマの版図に加えた。

(79) いまの英国の島。

(80) はつきりしないが、人質として連れて来られた異邦の青年と男色に耽る癖のあったカリグラ帝を暗に諷したとも言われる。

(81) アルメニア人など東方の民がはいっていたズボン。

(82) アルメニア王アルタクシアースの建てた主邑。ポンペイユスのときと、ネロー帝の時代コルドゥローという將軍によって二回ローマに敗れた。